

まみやりんぞう まめじてん  
間宮林蔵豆辞典

—間宮林蔵へのぎもんに答ます—



豆辞典シリーズ 2

樺太（からふと）が島であることを発見したことでゆうめいな、間宮林蔵の地図と測量についてのちょっとしたぎもんにお答えします。

ぎもんへの答は、だれでもが、かんたんにわかるようにくふうしたつもりですが、どうしてもわかりにくい、むずかしいところが、まだのこっているかもしれません。そこは、読みとばすなど、自由にお読み下さい。また、むずかしい言葉などは、お父さんやお母さんに聞いて下さい。

そして、もっと忠敬や地図・測量について知りたいと思った人は、図書館などを利用するとよいでしょう。

作・絵 やまおか みつはる  
表紙絵 伊藤久美子（伊藤デザインルーム）

もくじ

1. 間宮林蔵は、どこで生まれましたか
2. 少年時代の間宮林蔵は、どんなようすでしたか
3. 間宮林蔵は、どこで、だれから測量（そくりょう）を学びましたか
4. 間宮林蔵と伊能忠敬のかんけいは？
5. 間宮林蔵は、蝦夷（えぞ）のほかはどこを探検（たんけん）しましたか
6. 間宮林蔵は、一人で樺太（からふと）を探検しましたか
7. 間宮林蔵は、樺太になんで行きましたか
8. 林蔵といっしょに樺太を探検した松田伝十郎って、どんな人？
9. 間宮林蔵の、蝦夷地の測量のけっかは、どのような地図になりましたか
10. 間宮林蔵は、隠密（おんみつ）だったのですか
11. シーボルト事件は、間宮林蔵が密告（みっこ）

### く) したのですか

12. 間宮林蔵には、おくさんやこどもがいましたか

13. 間宮林蔵の作った地図や書物(しょもつ)は、のこされていますか

(主に参考とした図書)

「郷土の先人に学ぶ」 茨城県教育委員会

「伊能忠敬の科学的業績」 保柳睦美編著 古今書院

「間宮林蔵の再発見」 大谷恒彦著 筑波書林

「シーボルト先生1、2、3」 呉秀三著 平凡社

「甲子夜話」 松浦静山 東洋文庫 平凡社

「間宮林蔵記念館」パンフレット

(間宮林蔵記念館：茨城県筑波郡伊奈町大字上平柳 64)

なことですか」と質問(しつもん)しました。

先生が「そのとおりだよ」と答えますと。「それなら、先生におしててもらわなくても、わかっている」といってさっさと帰ってしまったといいます。

それほど、かしこい少年?であったようです。小貝川(こかいかわ)に近い、この村で林蔵は、15、6歳になるまですごしました。



林蔵の生まれた家

## 1. 間宮林蔵は、どこで生まれましたか

間宮林蔵(まみや りんぞう)は、いまから220年ほど前の1780年に、今の茨城県伊奈町(いばらぎけん いなまち)の上平柳(かみひらやなぎ)というところで、おひやくしようさんの子どもとして生まれました。

9歳の時には、村の寺子屋にかよい、読み、書き、そろばんを学んだそうです。林蔵の少年時代について、このような話がのこされています。

近くの寺子屋にかよって、そろばんをならっていたある日のことです。

わり算の授業(じゅぎょう)になったとき、先生から九九(くく)の練習(れんしゅう)をはじめるといわれると、林蔵は、「それは百を二つにわれば五十になるというよう

## 2. 少年時代の間宮林蔵は、どんなようすでしたか

林蔵は成長すると、その年の豊作(ほうさく)をねがうため、かぞくや村人につれられて、筑波山(つくばさん)におまいりにいくようになりました。

それからというもの、たびたび村人と山にのぼりましたが、13歳の時のことでした。

林蔵だけが夜になっても、ふもとの宿(やど)に帰ってこないのです。

かぞくや村人はたいへん心配(しんぱい)しました。

ところが、よく朝になると、手にやけどのあとが少しあるものの、元気にやどへ、もどってきました。

村人が林蔵から話を聞いてみると、その夜

は、頂上（ちょうじょう）のひとつである男体山（なんたいさん）の、わきを少しおりた大きな岩の下ですごしたそうです。

そこで、手に油をたらし、それに火をつけ、これを明かりにして、筑波山の神様（かみさま）に立身出世（りっしんしゅっせ：りっぱなひとになること）を、お願いしたのだといひます。

夜のあいだ中、出世をねがったという大きな岩は、筑波山の頂上（ちょうじょう）を5分ほど下ったところであり、林蔵の立身窟（りっしんくつ：出世をねがったどうくつ）とよばれています。

その岩のそばには、子孫（しそん）の手で記念碑（きねんひ）がたてられています。



どうくつのりんぞうくん

林蔵の、がまん強いせいかくを、あらわしているようなお話です。

### 3. 間宮林蔵は、どこで、だれから測量（そくりょう）を学びましたか

15歳ごろまで、上平柳（かみひらやなぎ）ですごした林蔵少年は、自宅（じたく）の近くを流れる小貝川（こかいかわ）で行われていた、せき止め工事（せきとめこうじ：水害をふせぎ、農業に使う水を利用しやすくするための工事）に、きょうみをもちました。

林蔵少年は、朝早くから日ぐれまで川の近くに立ち、ねっしんに工事の進みぐあいを見していました。

そのようすが、工事をたんとうしていた役人の目にとまりました。

そして、いつの日からか、お役人の雑用（ざつよう：こまごまとした仕事）を、手つだうようになったのでした。



りんぞうくん

その後、幕府役人（ばくふ やくにん）の一人であった、村上島之允（むらかみ しまのじょう）といっしょに各地をめぐり、土木工事（どぼくこうじ：川や道路などを作る仕

事)や絵図(えず)の作成を手つだいながら、いろいろな技術(ぎじゅつ)を勉強しました。

さらに、各地の調査(ちょうさ)や測量にも出かけることになり、その中で測量と地図作りを勉強したといわれています。

#### 4. 間宮林蔵と伊能忠敬のかんけいは？

1799年に幕府(ばくふ)から、蝦夷地(えぞち：今の北海道のこと)の見まわりを命令(めいれい)された一行(いっこう)に、主人の村上島之允(むらかみ しまのじょう)がえられました。そして、林蔵も村上のけらいとなり蝦夷にわたりました。

村上は、蝦夷地をくまなく調べてまわり、そのようすを幕府にほうこくしました。そして、二人はやくめを終わってからも蝦夷地のこり、植林(しょくりん：木をうえること)や農地の開拓(のうちのかいたく)などの仕事をしていました。

林蔵は、1800年(20歳のとき)になると、ふたたび蝦夷地の見まわりをたんとうする役

人として幕府にやとわれました。こんどは、正式(せいしき)な幕府の役人になりました。

その年のことです。緯度(いど：ちきゅうのうえの いちをあらわすたんい)1度のせいかな長さを知らるための測量をしながら蝦夷地にやってきた伊能忠敬と函館(はこだて)で会いました。

そこで林蔵は、伊能忠敬と多くの意見交換(いけんこうかん)をしたのでしょう。また、測量や地図作りのことだけでなく、よほど気が合ったようで、二人は先生と生徒としてのやくそくをしたようです。

忠敬は、その後函館から蝦夷地の南の海岸を東に進んで根室(ねむろ)の先まで測量しました。

#### 5. 間宮林蔵は、蝦夷(えぞ)のほかはどこを探検(たんけん)しましたか

1800年に忠敬と別れたあとの林蔵は、村上とともに蝦夷地を調査(ちょうさ)しました。

その後の林蔵は、なれない気候(きこう)のせいでしょうか、きびしい仕事のためでしょうか、病気になり一度江戸にもどります。

病気がなおると、ふたたび蝦夷地にわたり、蝦夷地はもちろんのこと、南千島、クナシリ島やエトロフ島まで測量し、新しい道を切り開き、蝦夷地の住民に植林(しょくりん)や農業などを教えました。

このときの蝦夷地は、松前藩(まつまえはん)がおさめていました。林蔵の目から見た松前藩は、もとの住民(じゅうみん)で

あるアイヌの人たちをくるしめ、ロシアなどの外国からの守りもわすれているように見えました。

そのころの日本は、鎖国（さこく：外国との貿易や行ききを、せいげんすること）をしていましたが、しゅうへんの海にはロシアやフランス、イギリスなどの外国の船がおとずれて、開国や貿易（かいこくやぼうえき）をもとめていました。

林蔵は、こうしたようすを心配して、蝦夷地だけでなく、クナシリやエトロフなどの日本の北の領土（りょうど）をすみずみまで調べ地図にしました（1807年）。

ところが、林蔵が進んだ東海岸は、北にむかうにつれ波があらく、小舟での探検（たんけん）がむずかしくなり、あきらめて山をこえ、伝十郎が調査する西海岸へ進みました。

伝十郎はというと、さらに北へ進んでいて、潮（しお）の流れのようすや、海をはさんでシベリアが見えたことなどから樺太が島であることをしんじて、林蔵のところにもどりました。

二人のこの年の探検は、これで終わりました。

## 6. 間宮林蔵は、一人で樺太（からふと）を探検しましたか

そして、1808年（28歳）になると、松田伝十郎（まつだでんじゅうろう）とともに、樺太（からふと：今のサハリン）探検をめいれいされます。

そのころ樺太は、島なのか、シベリアと陸つづきの半島であるか、よくわかっていませんでした。もちろん、地図の上でも半島となったり、あいまいな線で書かれたりしていました。

二人は、アイヌの人が案内（あんない）する小さな舟で、林蔵は東から、伝十郎は西へと二つに分かれて調査（ちょうさ）を始め、「樺太が、島であれば、いずれ再会（さいかい）しよう」とやくそくしました。



## 7. 間宮林蔵は、樺太になんど行きましたか

一度目の樺太探検（からふとたんけん）から帰った林蔵は、すっかりしませんでした。

樺太が、島であることを、自分の目で、もっとしっかりかくにんしたかったのです。

さっそく、そのころ蝦夷地をおさめていた松前藩（まつまえはん）に願い出て、再び調査（ちょうさ）にむかいました（1808年）。今度は林蔵だけの調査でした。

ところが、この年は、寒さがきびしく、とちゅうから引きかえしました。

さらによく年、食料や舟のじゅんびを十分にととのえて、北へむかいました。現地の住民（じゅうみん）を案内人（あんないにん）にして、樺太の北のはしにあるナニオーとい

うところまでとうちやくすると、こんどは海をわたり、シベリアにわたりました。

これで、樺太が島であることがはっきりしました。林蔵は、デレンという町まで行き、シベリアや当時の中国のようすなどを調査して帰りました。

1809年の冬に松前藩にもどった林蔵は、樺太探検のけっかを地図や本にまとめ、幕府に報告（ほうこく）しました。

この発見によって、樺太とシベリアの瀬戸（せと）のことが、「間宮海峡（まみやかいきょう）」とよばれるようになったのです。



「探検図」

## 8. 林蔵といっしょに樺太を探検した松田伝十郎ってどんな人？

林蔵といっしょに樺太を探検した松田伝十郎（まつだでんじゅうろう）のことをしょうかいしましょう。

伝十郎は、越後（えちご：いまの新潟県）に生まれました。

林蔵とおなじように、かくちの道路の工事などをかんとくしていた、大西栄八郎（おおにし えいはちろう）という、さむらいに見こまれて、江戸にいきました。武士（ぶし）としてのしゅぎょうをして、松田という家の養子（ようし）になりました。

幕府がおさめていた蝦夷地につとめることをきぼうし、樺太や蝦夷（えぞの）仕事をし

ていました。

そして、林蔵とともに樺太を探検することになります。まえにも、お話したように、伝十郎と林蔵は、島であればどこかで落ち合うことで、伝十郎は西海岸を、林蔵は東海岸を小船で北に向かいました。

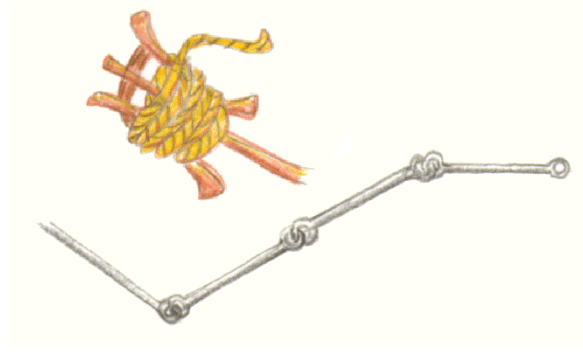
しばらくして林蔵は、北へいくことをあきらめましたが、伝十郎は、それより北にある、ラッカ岬（みさき）というところまで行きました。

伝十郎は、この時のようすと、すんでいた人たちの話しなどから、樺太（からふと）が島であると思ったそうです。江戸に帰ると、さっそく「樺太島図」という地図にしました。

ところが、そのごもn樺太にわたった林蔵は、シベリアにまでわたり、「樺太」が島であ

ることを発見し、幕府に報告（ほうこく）しました。

松田伝十郎のことを思っている人たちは、さいしょに樺太が島であると確認（かくにん）したのは伝十郎であって、隊長（たいちょう）である伝十郎にことわりもなく、林蔵が幕府に報告したのは、けしからんといっています。



長さをはかるためのものさし  
鉄鎖（てつさ）と間縄（けんなわ）

## 9. 間宮林蔵の、蝦夷地の測量けっかは、どのような地図になりましたか

樺太探検（からふと たんけん）などで有名になった林蔵は、江戸に帰ると、ふたたび伊能忠敬と会いました。そして、測量（そくりょう）の方法と地図を作ることを、もう一度忠敬から学びました。

その後、1811年（31歳）に蝦夷地（えぞち）にわたり、忠敬が調査しなかった蝦夷地の北と西の海岸にそって測量を始めました。

測量は、忠敬から学んだ方位と距離（きょり）を測（はかる）る導線法（どうせんほう）と、天体観測（てんたいかんそく）で誤差（ごさ:あやまり）をなおす方法でつづけました。

1817年には、林蔵の父が亡（な）くなり、一度ふるさとにもどりますが、その後も蝦夷地の測量をつづけました。

寒さのきびしい蝦夷地（えぞち）での測量は、年をとった伊能忠敬にはむずかしいことでしたから、せいじくなく林蔵の蝦夷地の測量結果が忠敬のもとに、とどけられたとしたら、大変よろこんだのではないかと思います。

しかし、林蔵の測量が終わったときには、忠敬はもう亡（な）なくなっていました。

忠敬が測量しなかった蝦夷地の北と西の部分は、林蔵の測量のけっかをそのまま利用して、忠敬の日本全図は作られました。

## 10. 間宮林蔵は、隠密（おんみつ）だったのですか

林蔵の蝦夷地（えぞち）での測量（そくりょう）のけっかも利用して、忠敬の弟子（でし）たちの手で日本全図ができあがりました。大広間（おおひろま）で広げられた地図に、将軍（しょうぐん）や大名たちはおどろきの声を上げたといえます。

このとき、林蔵の功績（こうせき）は、どのようにつたえられたのでしょうか。いまでは、わかりません。

林蔵は、樺太探検のあとは松前藩（まつまえはん）の役人（やくにん）となり、さらに蝦夷地測量のあとは幕府（ばくふ）の役人となり、外国から日本をまもるための仕事をしていたようです。

外国船が港に入ったとか、そうなんした船の外国人が上陸したという話があると、北は蝦夷地から南は九州まで、休むひまもなく見回りを続けました。

そして、諸国（しょこく）のようすなどを幕府にほうこくしていました。

このように林蔵の仕事は、戦国時代（せんごくじだい）のような隠密（おんみつ）ではありませんが、幕府のえらい人から、とくにめいれいされて、外国のようすと、外国に関係する各地の大名などのようすを調べ、せいかくにほうこくすることでした。

## 11. シーボルト事件は、間宮林蔵が密告（みっこく）したのですか

1823年シーボルトが日本にやってきました。長崎出島の医師（いし：おいしやさん）であったシーボルトは、日本人たちに、そのころの外国の文化や医学（いがく）、科学（かがく）などをしょうかいしながら、日本のようすを調べていました。

忠敬の先生であった、高橋景保（たかはしかげやす）もシーボルトと会いました。そして、彼が持っていた一冊の書物を手に入れたいと思い、日本地図とこうかんするやくそくをしたのです。

そんなとき、林蔵のもとにシーボルトから小包（こづつみ）がとどきました。林蔵は、小包を開くこともなく、奉行所（ぶぎょうし



残された林蔵の探偵（たんてい）用ずきん



よ)にとどけました。

小包のないようから、高橋景保とシーボルトの間で、地図や手紙のこうかんが多く行われているのではという、うたがいがおきました。それが、高橋景保が逮捕(たいほ)される、きっかけになったといわれています。

林蔵は、けっして密告(みっこく)したのではなく、「許可(きょか)なく、外国人とせってはいけない」という規則(きそく)をまもって、ほうこくしただけです。

シーボルトは、林蔵のほうこくが自分が取り調べられる、きっかけになったことを知っていたのですが、樺太が島と、シベリアとの間に海峡(かいきょう)があることを発見した人としてみとめ、地図にも「間宮瀬戸(まみやのせと)」と記入しました(1832)。

ることをくりかえしていましたから、林蔵の世話(せわ)をする人はいたのでしょうか、奥さんやこどもがいたようすはありません。

平戸城主が残した本には、「勘定奉行(かんじょうぶぎょう:今のおおくらだいじん)の密使(みっし:ひみつのしごとをする人)をつとめていたので、家にいることもすくなく、ただ一人、やとわれたばあやがいて、るすばんをしている。」と書いてあります。

林蔵の遺骨(いこつ:死んだ人のほね)は、ふるさとの上柳村(かみやなぎむら)にうめられました。すまいがあった東京深川の本立院というお寺にも墓(はか)があります。

ふるさとにある墓は、樺太探検の前に林蔵が自分で立てたのではないかといわれています。樺太を探検するということは、命がけであったことが分かります。

## 12. 間宮林蔵には、おくさんやこどもがいましたか

林蔵は1844年(65歳)のとき、江戸の自宅で亡(なく)くなりました。

亡くなるまでの数年間は、病気のため江戸にすんでいましたが、19歳のときに村上島之允(むらかみしまのじょう)につれられて蝦夷へわたってからというもの、ずっと旅(たび)のれんぞくでした。

とくに、樺太探検(からふとたんけん)と蝦夷地測量(えぞちそくりょう)のころは、江戸にもどることも少なく、りっぱな家ももたず、結婚(けっこん)するひまもなかったようです。

そののちは、各地を調査しては、江戸に帰

小貝川のほとりには、二つの質素(しっそ:かんたん)な墓がならんでいて、左は林蔵の、右はりょうしんの墓です。

ところが、林蔵の墓石の右面と左面には、二人の女の人の戒名(かいみょう:死んだ人につけられる名前)がきざまれているようです。さて、だれなのでしょう？



林蔵の墓

### 13. 間宮林蔵の作った地図や書物（しょもつ）は、のこされていますか

林蔵は、シーボルト事件のあとは、おもに勘定奉行（かんじょうぶぎょう）から命令された秘密の仕事をしていましたから、日本中を歩き回っていました。

樺太（からふと）や蝦夷地（えぞち）の探検（たんけん）をしていたころには、上司（じょうし：うわやく）であった村上島之允やその養子（ようし）の村上貞助（むらかみ さだすけ）などのきょうりよくにより、地図を作り、書物（しょもつ）も書きました。

それは、おもにクナシリやエトロフ、樺太などの地図であり、樺太やシベリアのようすをしょうかいした書物でした。

とくに、1810年ごろに作られた樺太の地図、「北蝦夷島図（きたえぞしまず）」と報告書（ほうこくしょ）、1822年ごろに作られた「蝦夷全図」はすばらしいものです。

林蔵は秘密の仕事をしていましたから、作られた地図や報告書は幕府にていしゅつされ、死んだあとは、すべてやきすてるように、遺言（ゆいごん）していました。

そのため、あとからうつし取った地図や少しの測量器具（そくりょうきぐ）などのほかは、あまりのこされていません。



残された林蔵のはんこ

2004年2月 第1刷発行

2006年8月 第2刷発行

著者：やまおか みつはる

発行所：藤 庄 印 刷

定価（税込み）200円  
（本体200円＋税）



「オフィス 地図豆」

（店主 やまおか みつはる）

〒300-1237 茨城県牛久市田宮 2-18-3

tel : 029-830-7511

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer/>

Copyright 2008 オフィス地図豆